

いかに最期を迎えるか

# 自分なりの「死の哲学」は

去る1月21日の未明に評論家の西  
部邁さんが逝去され、本紙に私も追  
悼文を書かせていただいた。西部さ  
んの最期は、ずっと考えてこられた  
あけくの自裁死である。彼をこの覚  
悟へと至らしめたものは、家族に介  
護上の面倒をかけたくない、という  
一点が決定的に大きい。西部さん  
は、常々、自身が病院で不本意な延  
命治療や施設で介護など受けたくな  
い、といっておられた。もしそれを  
避けるなら自宅で家族の介護に頼る  
ほかない。だがそれも避けたいとな  
れば、自死しかないという判断であ  
ったであろう。

このような覚悟をもった死は余人  
にはできるものではないし、私は自  
死をすすめているわけではないが、  
西部さんのこの言いは私にはよく  
わかる。いや、彼は、われわれに対  
してひとつの大きな問いかけを發し  
たのだと思う。それは、高度の医療  
技術や延命治療が發達したこの社会  
で、人はいかに死ねばよいのか、と  
いう問題である。死という自分の人  
生を締めくくる最大の課題に対して  
どのような答えを出せばよいのか、  
という問題なのである。今日、われ  
われは実に深刻な形でこの問いの前  
に放り出されている。

いくら思考から排除しようとして  
も、また、いくら美化しようとして  
も、老・病・死という現実とは、とて  
もきれいなことで片付くものではな  
い。仏教の創始者にとって人間の最  
大の苦とされた老・病・死の問題  
は、それが、決して他人には代替不  
能な個人的な事象であるにもかかわ  
らず、それを自力ではいかんともし  
がたい、という点にある。徹底して  
個人の問題であるにもかかわらず、  
個人ではどうにもならぬのだ。自  
宅にいて家族に看取ってもらうのが  
一番などといって、政府もこの方向  
を模索しているが、じっさいにはそ  
れは容易なことではない。また、家  
族にも事情があり、その家族もいな  
い者はどうすればよいのか、という  
ことにもなる。

やむをえず入院すると、そこでは  
延命治療が施される。私は、自分の  
意思で治療をやめる尊厳死（この言  
葉には少し抵抗を覚えるが）はもち  
ろん、一定の条件下で積極的に死を  
与える安楽死も認めるべきだと思  
う。だが、その種の議論さえ、まだ  
タブー視されるのである。

さ えき けい し  
佐伯啓思  
1949年生まれ。  
京都大学名誉教授。  
保守の立場から様々な事象を  
論じる。著書に「反・幸福論」など



# 異論のススメ

簡単な事実をいえば、日本は超高  
齢社会にはいつてしまっている。2  
025年には65歳以上の割合は人口  
の30%に達するとされる。介護施設  
の収容能力をはるかに超えた老人が  
出現する。また、現在、50歳で独身  
という生涯未婚率は、男で23%、女  
で14%となっている。少子化の現状  
を考慮すれば、一人で死ねばなら  
ない老人の割合は今後も増加するこ  
とになる。

おまけに医療技術や新たな医薬品  
の開発によって寿命はますます延び  
る。政府は人生100歳社会の到来  
を唱え、医療の進歩と寿命の延長  
は、無条件で歓迎すべきこととされ  
る。しかしそうだろうか。それはま  
た別の面からいえば、年若い体は  
弱っても容易には死ねない社会の到  
来でもあるだろう。ということとは、  
長寿社会とは、家族の負担も含めて  
長い老齢期をどうするか、という  
問題であり、その極限に、家族もな  
く看取るものもない孤独死、独居死  
という事実が待ち構えている、とい  
うことでもある。

とはいえ、統計的なことをここで  
述べたいわけではない。超高齢社会  
とは、人の死に方という普遍的なテ  
ーマの方に、われわれの関心を改め  
て振り向ける社会なのである。近代  
社会は、生命尊重、自由の権利、個  
人の幸福追求を基本的な価値として  
きた。それを実現するものは経済成  
長、人権保障、技術革新だとされて  
きた。しかし、今日、われわれは、  
もはやこれらが何らの解決ももた  
らさない時代へと向かっている。近  
代社会が排除し、見ないこととして

近代社会が、生命尊重や個人の自  
由、幸福追求を強く唱えたのは、た  
だ生きていけばよいからではなく、  
個人の充実した生の活動をかけがえ  
のないものと考えたからである。だ  
から、その条件として生命尊重や自  
由の権利などに重要な意味が与えら  
れたのだ。しかし、人は年若い、活  
力を失い、病に伏し、死に接近して  
ゆく。これが厳然たる現実である。  
いくら「充実した生の活動」といっ  
ても、その生がかげり、活動が意の  
ままにならない時がくる。

かつて、この「老い、活力を失  
い、病に伏し、死に接近する」苦に  
こそ人生の真相をみだしたのは仏教であ  
った。自由の無限の拡大や幸福追求  
をむしろ苦の原因として、この苦か  
らの解脱を説いた。それは、今日の  
近代社会のわれわれの価値観とはま  
ったく違うものである。ただ仏教が  
述べたのは、生は死への準備であ  
り、常に死を意識した生を送るべき  
だということである。死の側から生  
を見たということである。

別に仏教が死に方を教示してくれ  
るわけでもないし、仏教の復興を訴  
えようというのではない。「死」  
は、あくまで個人的な問題なのであ  
る。「死の一般論」などというもの  
はない。自分なりの「死の哲学」を  
模索するほかない。西部さんの自死  
は、あくまで西部さんなりの死の哲  
学であった。ただそれは、「では、  
お前は死をどう考えるのかね」と問  
いかけている。答えを出すのはたい  
へん難しい。だが、われわれの前に  
この問いがおかれていることは間違  
いないだろう。